

『新撰万葉集』における漢詩と和歌

—上恋101を中心に—

梁 青

キーワード 新撰万葉集 和歌 漢詩 翻案 対照表現

1. はじめに

『新撰万葉集』（以下本集と称す）は893年、古今集成立前夜に編纂された和歌集である。本集の歌の多くは「寛平御時后宮歌合」「是貞親王家歌合」から採られており、それぞれの和歌に一首の七言絶句の漢詩が付加されている。序文に「先生非啻賞倭歌之佳麗、兼亦綴一絶之詩、插數首之左（先生^{ただ}に倭歌の佳麗を賞するのみにあらず、兼ねて亦一絶の詩を綴りて、數首の左に^{さしは}挿さむ）」¹とあることから、『新撰万葉集』の漢詩が和歌を前提にして作られたことがわかる。そのため、漢詩の表現・発想には自然に和歌の影が色濃く落とされているのである。本稿では、『新撰万葉集』の上恋101の漢詩において、「和」と「漢」の二つの要素がどのように混ぜあわせられ、渾然一体化した詩的世界を構築しているかを検討することにより、漢詩の作り方を明らかにしたい。

2. 特異な対照表現

①上恋101 思筒昼者如此店名草咩都夜許曾涙不絶流禮²

（思ひつつ昼はかくても慰めつ夜こそ涙絶えず流るれ）

寡婦独居欲数年、 寡婦独居数年ならんと欲す

容顔枯槁敗心田、 容顔枯槁心田を敗る

日中怨恨猶忍、 日中の怨恨猶まさに忍ぶべし

夜半潜然涙作泉、 夜半に潜然として涙泉となる

当歌は「昼は思い続けても気を紛らわせた」と「夜は涙が止まらなくて泣き続けた」を対照させることによって、一日中恋に思い焦がれる心情を詠い上げた。それに対応する漢詩は、〈寡婦は独り暮らしの生活を何年も送ってきた。美

しい容姿がやつれてきて、昼はなんとか耐えられるが、夜になると、涙がはらはらと流れて泉のようだ」との意になる。

日本漢詩の表現を分析するには、中国詩にその典拠を求めるのは正当な手続きであろう。当詩の「心田」「欲数年」「猶応」などの詩語は白居易の漢詩で多く用いられ、後二句の「日中怨恨猶応忍、夜半潜然淚作泉」は白居易の「日中為樂飲、夜半不能休（日中樂飲を為し、夜半休むことあたはず）」（『白香山詩集』・卷二、秦中吟十首・歌舞）を踏まえることも指摘されている。³しかし、上恋101の漢詩は閨怨詩の世界を描き出しているが、白詩のほうは昼から夜まで歌舞が止まらずに続いている富人の贅沢な生活と次句の「豈知闕鄉獄、中有凍死囚」という囚人の悲惨な境遇とを対照的に詠んでおり、社会批判性に富んでいる。つまり、白詩は「日中怨恨猶応忍、夜半潜然淚作泉」の発想の源といえない。また、『新撰万葉集注釈』では「夜半雄声心尚壯、日中高臥尾還揺（羅隱・病驄馬）を例として引いたが、これも閨怨的イメージを持たない。⁴「日中…夜半」にとどまらず、「昼（朝）夜」が一首に詠みこまれるものを六朝の愛情詩に求めてみると、

②昼愁奄逮昏、夜思忽終昔（同「夕」）。（『芸文類聚』・卷三四、晉・潘岳・哀詩）

昼愁奄に昏に逮り、夜思忽ちに昔（同「夕」）に終る。

③脩昼興永念、遙夜独悲吟。（『玉台新詠』・卷三、李充・嘲友人詩）

脩昼に永念を興し、遙夜に独り悲吟す。

④思君如日月、回還昼夜生。（『玉台新詠』・卷十、宋孝武・擬徐幹詩一首）

君を思ふこと日月の如し、回還昼夜生ず。

⑤春蠶不応老、昼夜常懐糸（同「思」）。（『玉台新詠』・卷十、近代雜歌三首其三・蠶糸歌）

春蠶に老ゆべからず、昼夜常に糸（同「思」）を懐く。

のように、少なからずある。「昼」と「夜」を対照させて恋人への止むことのない思いを表している。しかし、②③では綺麗な対句をなしているが、「愁」を「思」に、「念」を「悲」に言い換えるだけで、昼と夜の心情が大いに異なるとはいえない。それより、④⑤のような詠み方は数多く存在している。「昼」と「夜」の二文字を連用することで一日中思い続けている様を表現する。唐代の詩文は六朝の詠み方を受け継いでいる。

⑥夜夜空知心失眠、朝朝無便投膠漆。（『游仙窟』、張文成）

夜夜空しく心の眼を失ふを知り、朝朝膠漆を投ずるに便無し。

⑦朝憎鶯百轉、夜妬燕雙棲。（『白氏文集』・卷十八、白居易・閨怨詞三首）

朝鶯の百轉を憎み、夜燕の雙棲を妬む。

⑧日夜懸心憶、知隔幾年秋。(『游仙窟』、張文成)

日夜懸かはるかに心に憶ふ、幾年の秋を隔つるを知らんや。

⑨蜀江水碧蜀山青、聖主朝朝暮暮情。(『白氏文集』・卷十二、白居易・長恨歌)

蜀江水碧にして蜀山青し、聖主朝朝暮暮の情。

⑧⑨の「日夜」「朝朝暮暮」はいうまでもなく、朝夜を分けて詠んだ⑥⑦においても、情緒の起伏が見られない。上から分かるように、伝統的な閨怨詩では、昼夜の心情が同質のものとして扱われている。それに対して、上恋101の「日中怨恨猶応忍、夜半潜然泪作泉」では、一日中悲しみに暮れている様子を表現するだけでなく、昼夜の心情が対照をなしている。昼間の「沈静」と夜の「高揚」を対照させることで、細やかな感情が吐露されている。

どうして中国の閨怨詩に「昼…夜…」の対照表現が見えないかという点、それは閨怨詩が殆ど辺地へ赴いた夫や、他郷に遊学する夫を待っている女の悲しみを詠んでいるからである。この二つの状況は、男が長い間不在である点で共通している。「君行逾十年、孤妾常独棲(君行きて十年を逾ゆ、孤妾常に独り棲む)」(『玉台新詠』・卷二、曹植・雑詩五首)「自期三年帰、今已經九春(自ら期き三年にして帰らんと、今已に九春を経たり)」(同上)のように、年を単位として男の訪ぬぬ日を計算するのが普通である。恋人の帰る日を知る方法がないので、昼夜を問わず怨みを綿々と訴え続けているのである。ゆえに、昼夜の心情が「沈静」から「情熱」へと変化するわけではない。

一方、平安初期は、「国風暗黒時代」と称されるほど漢詩文の全盛期を迎えており、閨怨詩の時間表現がいち早く上代日本漢詩に取り込まれた。

⑩君不見妾離別、昼夜吁嗟涕如雪。(『文華秀麗集』・艶情、巨勢識人・奉和春閨怨)

君見ずや妾が離別を、昼夜吁嗟きて涕雪の如し。

この詩は中国の閨怨詩のパターンを踏襲しており、空閨に籠り絶望を味わって日々を送ってきた女性の姿を詠んでいる。「昼」「夜」を連用することで強調の目的を十分に果たしているが、心情の対照はなされていない。「日中怨恨猶応忍、夜半潜然泪作泉」は中国の閨怨詩に照らし合わせると、中国詩の枠からずれてしまう詠み方である。王朝漢詩文においてその類例が殆ど見いだされないということからも、上恋101漢詩の対照表現の特異性が了解されよう。

3. 先行する和歌における対照表現

上の分析により、特異な対照表現「日中怨恨猶忒忍、夜半潜然涙作泉」は先行する和歌「思ひつつ昼はかくても慰めつ夜こそ涙絶えず流るれ」に由来していることが容易に推測できよう。ただし、急いで結論を出せば、主観的になりすぎる嫌がある。なぜかという、一世紀もの間、漢詩文の洗礼を受けた結果として、『新撰万葉集』の和歌は漢詩文から大きな影響を受けているとする見解があるからである。⁵和歌における時間の対照表現が果たして漢詩文に影響されないまま、上恋101の詩に詠み込まれうるかどうかについては、さらなる検討が必要である。以下に万葉から古今への恋歌に詠まれる「昼…夜…」の対照表現を考察することで、漢詩影響の有無を検証し、詠歌背景を明らかにしたい。

3.1 万葉集における対照表現

万葉集において、「昼」「夜」を分けて詠んだ恋歌は僅か十首である。⁶その中で、六首が「同語反復型・終日終夜型」に属している。典型的な二例を取り上げると、

①筑波嶺のさ百合の花の夜床にもかなしけ妹そ昼もかなしけ（巻二十・4369・天平勝寶七歳乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌・大舍人部千文）

②…昼はも日のことごと夜はも夜のことごと立ちて居て思ひそ我がする逢はぬ児ゆゑに（巻三・372・登春日野作歌一首・山部赤人）

とある。①は「同語反復型」であり、傍線部の「かなしけ」が繰り返して詠まれる。②は「終日終夜型」であり、昼夜の心情表現を細かく描くものではなく、一日中ずっと思い続けていることを強調する。これらの歌における「昼…夜…」は韻律的效果を狙いとし、歌の心に深く結び付いていない。一方、以下の三例は初めて昼夜の情景や心情を区別して表現したものである。

③…つま屋のうちに昼はもうらさび暮らし夜はも息づき明かし嘆けどもせむすべ知らに恋ふれども逢ふよしをなみ…（巻二・210・妻死之後泣血哀慟作歌・柿本人麻呂）

人麻呂は妻を亡くした後、昼は心さびしく日を暮らし、夜はため息ばかりついて明るくなるまで時を過ごしている。人麻呂の挽歌は潘岳の哀傷詩に影響を受けたと言われている。⁷潘岳の内顧詩「夜愁極清晨、朝悲終日夕（夜愁清晨を極め、朝悲日夕を終ふ）」（『玉台新詠』・巻二）は泣血悲慟歌の対照表現に類似しているが、「愁」と「悲」との情緒の差はそれほど大きくない。それに対し、泣血悲慟歌における「夜はも息づき明し」は「昼はもうらさび暮らし」の言い

換えでなく、具体的な動作でそれと明確に区別し対照させている。

④あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ（巻十五・3732・中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌・中臣宅守）

流罪に処せられた中臣宅守が狭野弟上娘子に送った歌である。昼は物思い夜は一夜中泣いてばかりいるという別離の切なさを訴えている。この歌は「…あかねさす昼はしみらにぬばたまの夜はすがらに寝も寝ずに…」(巻十三・3297・作者不明)に基づいているものの、意識的に言語表現を練り上げて表現している。しかも当歌の発想は上恋101の「昼はかくても慰めつ夜こそ涙絶えず流るれ」に近く、昼と夜の違いは明確である。

⑤昼は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花君のみ見めや戯奴さへに見よ（巻八・1461・紀女郎贈大伴宿禰家持歌・紀女郎・「右折拵合歡花并茅花贈也」の左注あり）

紀女郎は男女の和合を想わせる合歡木の花を詠んで、家持を共寝に誘った。合歡木の習性を利用して、昼と夜との区別をはっきりさせる機智に富んだ歌である。この歌は人麻呂や中臣宅守の歌と比べて対照性が強く、寄物陳思の対照表現も万葉集の中でやや異色を放っている。当歌について、小島憲之は合歡木の字面から男女の睦び・共寝を連想させ、『玉台新詠』の合歡歌「試看機上交龍錦、還瞻庭裡合歡枝（試みに看る機上の交龍の錦、還た瞻る庭裡の合歡の枝）」（巻九・春別応令四首其二・東湘王繹）を下敷きにしたという。⁸『和名抄』（草木部）の「合歡木其葉朝舒暮斂者也（合歡木、其の葉朝舒ばして暮斂める者也）」という記載からも、当歌における昼夜表現と漢文学との親縁性がより明らかとなる。にもかかわらず、昼間の「咲き」は合歡花の生態だけ表し、人間の心情・動作に関わらない。上恋101のような対照表現とはまだ一定の距離がある。

要するに、万葉集の「昼…夜…」の恋歌において、「同語反復型・終日終夜型」の対照表現が大半を占めている。昼夜を分けて詠んだとしても、ただ繰り返し・言い換えにとどまっている。それに対して、③④⑤の歌は技巧的に優れ、内容上の均整調和を備えており、鮮明な対照をなしている。その対照表現は上恋101の歌に繋がっていく。

九世紀末の寛平御時后宮歌合になると、万葉集の「終日終夜型」・「同語反復型」は見られなくなり、対照型の歌が中心となっている。

⑥おもひつつひるはかくてもなぐさめつ夜こそ涙つきずながるる（恋・左・178・詠み人知らず）

⑦ひとりぬる我が手枕を昼はほし夜はぬらして幾代へぬらむ（恋・左・184・詠み人知らず）

178番は上恋101の他出歌であり、結句は「つきずながるる」とある。184番の「枕とした腕に流れる涙が、昼は干して、夜はまた濡らす」の対照を通して、独り寝の寂しさが強く読み取れる。この二首の歌合歌は、万葉集の対照表現の延長線上にある。「慰める・慰めがたい（涙流す）」「干す・濡らす」は、昼夜にそれぞれ限定される情景なので、その位置を逆にすることができない。そして、昼間の気分の沈静と夜中の高揚とは対照的である。両者の甚だしい差異を図ることで、「思ひつつ」の情熱とわが身の孤独を表している。この手法は、万葉集の言い換えの対照表現より力強く、心情の表出に効果的に機能している。

恋歌における「昼…夜…」の対照表現の生成は通い婚の伝統に密接に繋がっている。男は夜女のところに通い、朝になると人目を忍んで離れていく。従って、昼を「逢えない」時間、夜を「逢える」時間とすることが、それぞれ歌の世界で定型化している。前に取り上げた紀女郎歌では、「夜は恋ひ寝る」によって男女の逢瀬が反映されている。なお、当歌においては、夜の逢瀬だけに焦点があてられ、昼間の心情・動作は描かれていない。つまり、形式的には対照表現をなしているとしても、内容上の対応はそれほど重視されていないのである。上記の歌合歌になると、昼間の具体的な心情描写までに関心が寄せられている。夜の「逢う・寝る」に対して、「慰む・(涙) 乾く」が昼に特定される情景として詠まれるようになるのは、対照表現の発達や言語意識の成熟に深く関わっている。

3.2 古今集における対照表現

寛平御時后宮歌合歌をはじめ、昼夜対照の発想が古今前後に普及していくと、対照表現には再び変化が起こってくる。縁語・掛詞は心情と物象とを繋ぎ合せ、二重の文脈を形成する。⁹それによって対照表現がより複雑な様態を呈している。具体例に即してみよう。

⑧明けたてば蟬のをりはへなき暮らし夜は螢の燃えこそわたれ（古今・巻十一・恋一・543・読み人知らず）

この歌は、己を日が暮れるまで鳴いて過ぐす蟬、夜燃えつつている螢に見立てる。「昼蟬已傷念、夜露復沾衣。昔別曾何道、今夕螢火飛（昼蟬已に念を傷ましむ、夜露復た衣を沾す。昔別れしとき曾て何をか道ひしぞ、今夕螢火飛ぶ）」（『玉台新詠』・巻十、吳均・雜絶句四首之一）における「昼の蟬・夜の螢」の対を学んで、固有の心情をより具象化させる。その上、「なく」という語音を媒介として、「泣く」と「鳴く」とを掛け、恋に苦しむ心情と蟬とを繋ぎ合わせる。さらに「螢・燃える」より「火（思ひ）」を想起させる。すると、「昼・蟬・鳴

き」と「夜・螢火・燃える」、「昼・泣く」「夜・思う」の二つの対照をなしており、恋に焦がれる己の心をかたどっている。なお、当歌はこれまでの伝統（「昼物思ふ・夜泣く」）を反転して表現していることに注意したい。

⑨とにのみきくのしら露夜はおきて昼は思ひにあへずけぬべし（古今・卷十一・恋一・470・素性法師）

菊の白露に託して、身を焼き焦がすほどの激しい恋心を表している。万葉歌「夕置きて朝は消ぬる白露の消ぬべき恋も我れはするかも」（卷十二・3039・寄物陳思・作者不明）を踏まえて作られた一首である。表面上、菊の露の夜置くことと、日の光を浴びて消えていくことを対照させて、露のはかなさを表現する。裏には、夜は安らかに眠れず起きてしまい、昼は恋しい思いに耐えられず死にそうだという心情上の対照がみられる。この二重の対照構造は、「きく」「おきて」「ひ」等の縁語・掛詞によって実現されたのである。このように、「昼…夜…」の対照表現は歌合歌を継承しながら、縁語・掛詞などの技巧と互いに響き合うことで、より複雑な知的表現に辿り着いたのである。

これまで、「昼…夜…」の対照表現の流れを詳しく検討してきた。この表現は万葉集の歌に遡ることができる。上恋 101 の歌「思ひつつ昼はかくても慰めつ夜こそ涙絶えず流るれ」は万葉から古今への転換点に位置づけられ、素直な感情を流露している。恋歌における「昼…夜…」の対照表現は、中国詩の影響を受けたというより、平安朝の婚姻形態を背景に、固有の和歌表現から発展してきたものと見るべきであろう。叙情性という和歌の固有の特徴が対照表現志向の根底にあるので、一日を通した繊細な心の動きに強い関心が寄せられるのである。これに対し、中国詩の「昼…夜…」においては、心理的变化がそれほど細かく描かれていない。以上の分析によって、上恋 101 の漢詩にみえる対照表現は和歌に由来していることが明らかになる。

3.3 待つ女の歌

それでは、以下の和歌を参照することで、上恋 101 の歌がどのような場で詠まれているかを分析してみたい。

⑩満つ潮の流れひるまを逢ひがたみみるめの浦によるをこそ待て（古今・卷十三・恋三・665・清原深養父）

⑪うらみてもしほのひるまになぐさめつ袂に波のよるいかにせん（深養父集・29）

⑫我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに（古今・卷十五・恋五・770・僧正遍照）

⑬いかにして夜の心をなぐさめむ昼はながめにさても暮らしつ(千載集・卷十四・恋四・840・和泉式部)

⑭花見ても目をば暮しつ青柳のいとくるしきはよるにぞありける(和泉式部集・598)

第一首目の歌では、噂が立つのを恐れ、夜を待って逢おうという思いを、潮の干満で打ち寄せられている海松布に寄せる。「昼・逢ひがたみ」と「夜・待つ(逢える)」が対照をなしている。この歌から、上恋101は恋人に逢えない悲しみを訴えることがわかる。なお、上恋101で詠われている主体が男か女かは明確であるとは言い難いが、同想の歌はほぼ「待つ女」の立場に立って詠まれている。例えば、⑪は、怨んでいるとしても昼間ならば気を紛らわすこともできるが、袂が涙で濡れる夜はどうしたらいいだろう、という歌である。「逢おうとしてくれないあの人を怨む」という表現から、当歌が待つ側の立場で詠まれるものだと推測できよう。九世紀後半、男性歌人による「待つ女」の歌が盛んに詠まれている。⑫の歌はこの風潮を端的に示しており、遍照法師が荒れ果てた家で男を待っている女の立場に立って詠んだ歌である。このような女性仮託の詠み方には、中国閨怨詩の影響が看取できる。¹⁰こうして見てくると、⑪は深養父の作だが、女の心情を仮託して詠んだ可能性が高い。¹¹上恋101の歌も実際の恋を背景として詠まれたものではなく、男性歌人が女の立場に立って詠んだ歌だと思われる。また、上恋101は「待つ女」の歌であることは次の歌において一層明らかである。⑬は「どのようにして夜の寂しい心を慰めたらいいか、昼は眺めてなんとか過ごしたが」という意味であり、昼夜の絶え間ない恋の物思いを訴えている。上恋101の歌の語順を逆にしているが、内容はほぼ同じである。⑭はいくら辛いといっても、昼間は花を見て気を紛らして過ごしたが、夜こそ苦しくてたまらない、という意になる。二首とも和泉式部の歌であり、男を待ち詫びる女の立場から空閨の怨情を詠んだものである。これらの類歌を踏まえて、上恋101の和歌を「待つ女」の立場で詠まれるものとしてとらえておきたい。

4. 和歌から漢詩への翻案過程

『新撰万葉集』漢詩の七言四句の形について、小島憲之が「五・七・五・七・七の三十一字の歌は、一般に二句の詩によってほぼ歌意を表現し得る。しかし一首の詩は少なくとも四句の結合なくしては成立しない。そのため、歌意を多少それてはいても新しく二句の詩句を加え、全体として四句一首の詩として成

立させねばならない。…歌意を満たす以外の詩句には、詩人の空想の世界がある。そこには作者の遊び〈あや〉の世界が存在する¹²と高いレベルの論考を行っている。以下、小島説を踏まえて、上恋101の漢詩を「歌意を満たす二句」と「余りの二句」に分けてそれぞれ検討し、漢詩が如何に和歌をもとにして展開していくのかを明らかにしたい。

4.1 歌意を満たす二句

上恋101の歌「思ひつつ昼はかくても慰めつ夜こそ涙絶えず流るれ」がそのまま漢詩の後二句「日中怨恨猶応忍、夜半潜然泪作泉」に移されたように見える。しかし、和歌的表現・発想を漢詩の上に表現することには、単に和語を漢語に読み替えるだけでなく、対照表現などの「和的要素」を漢詩の体系の中に組み込んでいくのに色々工夫が必要である。

まず、待つ女の嘆きを思わせる恋歌に対し、上恋101の漢詩は寡婦の閨怨的世界を詠んでいる。上恋101のみならず、『新撰万葉集』の恋の部立は例外なく恋歌に閨怨詩を対応させている。この対応について、渡辺秀夫が「和歌の恋歌が、その発想様式としてほぼ漢詩の閨怨詩に対応するという、習合的理解認識は、平安初頭以来はやくから馴染みのものであったから、この種の対応はごく自然に、また巧みになしたわけだ¹³と述べた。「待つ女」の歌は、女の独り寝の寂しさという点において、閨怨詩と共通する側面を有している。内容の面で、万葉以来の対照表現「昼…夜…」が白詩の対句「日中…夜半…」に極めて似ているので、容易く翻案を実現させる。また、歌の語句「夜こそ涙絶えず流るれ」は「夜半潜然泪作泉」に換えられる。女が夜涙を流すという発想は寡婦詩でよく使われている。

①霜被庭兮風入室、夜既分兮星漢回。…口嗚咽以失聲兮、淚橫迸而霑衣。(『文選』・卷十六、晉・潘岳・寡婦賦)

②日掩曖兮不昏、朗月皎兮揚暉。坐幽室兮無為、登空牀兮下幃。涕流連兮交頰、心慙結兮増悲。(『芸文類聚』・卷三四、魏・王粲・寡婦賦)

とあるように、いずれの詩も寡婦が夜嘆いたり涙を流したりする様を描いており、耐え難い独り寝の侘しさを伝えている。上恋101の漢詩の第四句目はこの発想を念頭に置きながら、巧みに和歌の語句に対応している。なお、上恋101の歌では、「こそ」という言葉によって、「夜」のことを強調している。漢詩も歌に従って、「猶応」を用いることで詩の重心を「夜」に移動させる。詩全体は「待つ恋」の和歌を閨怨詩の体裁になして作り替えたものといえる。

ところが、そもそも和歌と漢詩はそれぞれ固有の表現法を持っている。同じく女の内面に目が向けられるとしても、歌と詩の背景や表出情緒が必ずしも同じとはいえない。前に述べたとおり、夜中悲しみがいよいよつのるのは、逢瀬が叶えられないからである。和歌の表現は通い婚に密接に関わっているので、漢詩で歌意を完全に再現することが極めて困難である。それゆえ、漢詩では和歌と異なる世界が繰り広げられていく。主人公が歌の「待つ女」から「寡婦」に、相手が「いつまでもやってこない男」から「死んだ夫」に転換されるとともに、歌にみられる「思ひつつ」が「怨恨」という心情語に換えられる。

「怨恨」といえば、前に触れた深養父歌「うらみてもしほのひるまになぐさめつ袂に波のよるいかにせん」を思い出させる。「うらみてもしほのひるまになぐさめつ」が「日中怨恨猶応忍」と重なりあうようにみえる。恋歌における「怨む」とは「相手の心配りやしうちに対する不満を直接言いかけるのでなく、もっと屈折した、相手の心にまつわりつくような姿態を示している」¹⁴とされている。即ち、深養父歌における「うらむ」は、待つ女が希望を抱きつつ男の来訪を催促する「恋の擬態」であり、「憤恨」に至らない。上恋 101 の歌においても、女が思慕のほか、逢瀬が叶えられない怨みを抱いているだろうと思われる。一方、配される漢詩では、「日中怨恨猶応忍」を「昼はかくても慰めつ」に対応させている。『大漢和辞典』では「怨恨」を「うらむ」と訳しているが、引かれる用例「財亡民罷、莫不怨恨（財亡くして民罷れ、怨恨せざること莫し）」（国語・周語下）に端的に示されているように、「怨恨」と歌ことば「うらむ」とは情緒にかなりの相違がある。¹⁵上恋 101 の漢詩にみられる「怨恨」は強い不満・憤懣を含んでおり、望みが絶える悲哀を表している。また、歌における「慰む」は一時的に憂い気持ちが紛れることを意味するが、漢詩では「忍」をそれに対応させている。「忍」は辛いことをじっと我慢する感情抑圧の様を表しており、「慰む」より心の悲しみや不満の度合いが強い。このように、上恋 101 の歌の、待つ女の癒しがたい恋情の苦しみは、寡婦の抑圧された悲しみと鮮明な対照をなしている。

それでは、「日中怨恨猶応忍、夜半潜然涙作泉」を一体どのように理解したらいいのか。寡婦は昼間はほかのことにまぎれて悲しみを耐えきれるが、夜独り寝るときは、亡くした夫のことが自然に思い出され、やるせない孤独の気持ちがあるもう抑えられなくて涙に暮れる、というようにとらえていきたい。『礼記・坊記』の「寡婦不夜哭（寡婦は夜哭せず）」では、夜中に泣いてはいけないという寡婦に対する教訓がみられる。夜でさえそうであるならば、人目につきやすい昼間はいくら悲しんでいても我慢するほかはない、という寡婦の内面が想像で

きよう。こうしてみると、上恋101の和歌の翻案は、理路整然として間然する所が殆どないといえる。

4.2 余りの二句

歌は叙情性を発揮して屈折した心理を詠い上げているが、それ以外のことは読み手の想像に委ねられるしかない。一方、上恋101の漢詩は後二句で女性の内面を描いて歌の内容を言い尽くしている。歌意が満たされると、残された二句に内面以外のものに関心を向ける余地が生じる。それをどう漢詩に書き出すかは漢詩作者の力量の見せどころである。

翻案にあたっては、歌の一定の語句・雰囲気詩想を働かせ、それをめぐって漢詩を創作するという過程が想定できる。さらに具体的にいうと、和歌には恋人に逢おうとしても逢えない孤独が漂っている。漢詩作者は歌の孤独感から、漢詩によく詠まれている、夫を偲び眠れぬ寡婦の境遇を連想し、「寡婦独居欲数年、容顔枯槁敗心田」の二句を付け加えたのである。この二句は以下のような中国詩を踏まえながら、主人公の身分や境遇を補完し、歌にはない具体的で視覚的なものへと展開していく。魯の寡婦陶嬰が自分の心境を詠みあげる詩である。

③悲夫黄鵠之早寡兮、七年不雙。宛頸独宿兮不与衆同。夜半悲鳴兮想其故雄。天命早寡兮独宿何傷。寡婦念此兮泣下数行。嗚呼哀哉兮死者不可忘。(『古列女伝』・卷四・貞順伝・魯寡陶嬰、漢・劉向)

黄鵠の早く寡なる、七年^{なら}雙^ばばず。宛頸^{えんけい}独宿して衆と同じからず。夜半悲鳴して其の故雄を想ふ。天命早く寡となる、独宿何ぞ傷ん。寡婦^{おも}此を念うて、泣下ると数行。嗚呼、哀哉かな死者忘るべからず。

勿論、これは必ずしも上恋101の直接的な典拠ではなく、より広い意味での閨怨詩の受容が考えられる。「寡婦独居欲数年」は、陶嬰が七年ほど独り暮らしの生活を送ってきたという詠み方に近似し、年数の設定が漢詩の悲劇性を高める。「独宿何傷・嗚呼哀哉」という心情語が「怨恨・敗心田」の寡婦の内面描写に共通している。黄鵠の「夜中悲鳴」は、輾転反側し涙を流す姿を連想させ、「夜半潛然淚作泉」に相当する。また、閨怨詩では「玉顔盛有時、秀色隨年衰（玉顔は盛なるに時有り、秀色は年に随って衰ふ）」(『玉台新詠』・卷二、傅玄・樂府七首之明月篇)のような描き方が多く見られる。女性の容貌の衰えを詠んだことによって、空閨の怨みがより効果的に伝わってくる。上恋101の漢詩においても、閨怨詩の詠み方を意識しながら、「容顔枯槁敗心田」で歌にはない長年やもめ生活をしてきた寡婦の心身状態を描き出して、悲しい雰囲気を醸し出

している。要するに、上恋 101 の漢詩の「余りの二句」は、閨怨詩の常套表現を詠み込んだことで、具体的な場面を構成しており、歌と異なる趣を呈している。

また、「余りの二句」には詩人の創作力や遊び心が反映されている。「容顔枯槁敗心田」は単なる人物の様子・心境を描写するだけでなく、縁語的な趣向を含んでいることは殆ど注意されていない。¹⁶「枯槁」の本義は草木が萎んで枯れることであり、転じて人がやつれてしまう意に用いられている。「心田」は心を作物を生み出す畑にたとえて、善悪・煩いの種子を育てるところとしている。「敗」とは心が崩れてしまうという意を表すが、植物が枯れたことをも指している。¹⁷「敗心田」の用例は殆ど見られないので、「敗」は意図的に使われたと考えられる。そうであれば、「容顔枯槁敗心田」は容貌が衰えて心が朽ち果てたことを指す一方で、字面からは自然景物をも連想させる。勿論、「心田」という語は『新撰万葉集』の詩人が初めて用いたものではなく、仏典や中国詩に由来している。

④由是縁故当知、摂受地獄諸苦業道、当知下生盲種子其心田。(『大宝積経』・卷四七)

⑤沢雨无偏、心田受潤。(『芸文類聚』・卷七七、梁・簡文帝・上大法頌表)

⑥性海澄淨平少浪、心田灑掃淨無塵。(『白氏文集』・卷七一、白居易・狂吟七言十四韻)

⑦家業年租本課詩、情田欲倦莠言滋。(『菅家文草』・卷二・120、菅原道真・予作詩情怨之後、再得菅著作長句二篇。解釋予憤、安慰予愁。憤釋愁慰、朗然如醒。予重抒蕪詞、謝其得意。本韻)

⑦以外の用例は、いずれも仏教と関わり、恋と無関係である。④は「心に煩いの種を撒くことによって、地獄で罰を受ける」の意。⑤は雨を教導の言葉に喩え、それが心を潤すことをいう。⑥は垢に覆い隠された心を掃除して、煩惱から抜け出したことを表す。⑦の道真詩における「情田」は「心田」から発想した造語であり、その詠み方が「容顔枯槁敗心田」に一番近い。上恋 101 の詩と仏教と関わらない点で共通しているのである。「情田欲倦莠言滋」は「人情がずさんで、噂がどんどん広がっていく」という内容となる。一方、「莠」の本義は野草であり、「滋」は草木が茂る意を持つ。¹⁸すると、「田・莠・滋」が自然景色を表す語として関係づけられ、さらに詩序にある「蕪」に繋がってくる。「田・莠・滋・蕪」にせよ「枯槁・敗・田」にせよ詩の主意（現実批判・女の様子）と殆ど関係なく、縁語的に用いられている。この巧妙な表現法は詩人の漢詩の教養を示している。『新撰万葉集』の漢詩は従来道真作とされているが、

上記の例において両者は確かに接近している。¹⁹このように考えるならば、『新撰万葉集』の漢詩表現を考察するに当たっては、出典論にとどまらず、和歌との関わりや言語間の関連性を徹底的に追求することが、新たな読みを可能とするのではないかと思われる。

5. おわりに

以上、上恋101の漢詩と和歌の関係性について検討してきた。当詩にみえる昼夜の対照表現は中国詩にみられないもので、和歌的発想を取り入れて作られたものである。そもそも和歌と漢詩は、それぞれ固有の表現、発想を持っている。上恋101の歌意を漢詩の上に表現して、破綻をきたすことなく七言四句の漢詩として成り立たせるためには、幾つかの操作が必要である。

まず、恋歌の表現・発想を漢詩に反映させるために閨怨詩風に仕上げるのが最も有効である。ゆえに、漢詩の創作において、詩全体として寡婦の空闇の孤独を歌の「待つ女」の心情に対応させている。閨怨的背景を設定した上で、後二句では和歌の対照表現と叙情性を生かして、中国の閨怨詩にない複雑な心の動きを描き出している。そして、歌意を伝えるには、漢詩の二句で十分表現できるため、残りの二句に漢詩作者の工夫が見られる。前二句(即ち「残りの二句」)では、和歌にない女の身分、容貌、境遇など新たな要素を導入し、和歌が詠まれる状況を具体的に設定することによって、孤独な心情を具象化させていくとともに、一首の閨怨詩として成立させることになる。しかも修辞上の工夫には、漢詩作者の創作力や「遊び心」が反映されている。このように、上恋101の漢詩は閨怨詩の語句を和歌の表現・発想と融和させることで、独自の創作を達成することができたのである。

注

- 1 新聞一美編『新撰万葉集注釈』、新撰万葉集研究会編、和泉書院、2005年2月、5頁。
- 2 原撰本(久曾神昇『新撰万葉集と研究』未刊国文資料刊行会、1958年)を用いた。歌番号は前掲『新撰万葉集注釈』に従う。なお、流布本第四、五句は「夜曾侘杵独寝身者(夜ぞ侘しき独寝る身は)」とある。『新拾遺和歌

- 集』(巻十三・恋三・1161・読み人しらず・第四、五句は「夜ぞ侘しき独寝の身は」とある)に他出歌が収められて、「菅家万葉集歌」と記する。
- 3 小島憲之は「恋歌と恋詩—万葉・古今を中心として」(文学第44巻第3号、1976年3月、304~305頁)で上恋101の漢詩における白詩語の受容について詳しく考証した。
 - 4 前掲『新撰万葉集注釈』(428頁)を参照。
 - 5 小島憲之「九世紀の歌と詩——『新撰万葉集』を中心として」(関西大学国文学会・国文学第52号、1975年)などの論文に詳しい。
 - 6 その中で、「昼夜といはず・昼夜わかず」の形を取る歌は5首である。「ますらをの現し心も吾は無し夜昼といはず恋ひし渡れば」(万葉・巻十一・2376・柿本人麻呂)のように、夜昼の区別もなしに恋ひつづけていることを詠じる。
 - 7 辰巳正明『万葉集と中国文学』「第八章 潘岳の〈寡婦賦〉と泣血哀慟歌」笠間書院、1987年2月-1993年5月、266-287頁。
 - 8 小島憲之『上代日本文学と中国文学』(中)「第七章 遊仙窟の投げた影」塙書房、1964年、1063~1065頁。
 - 9 鈴木日出男は『古代和歌史論』(「序・第四章 和歌の表現における心物対応構造」東京大学出版会、2001年1月)で「心物対応構造」論を唱えた。
 - 10 山口博『閨怨の詩人小野小町』(三省堂、1979年、152頁)参照。また、菊地靖彦は「『新撰万葉集』をめぐる—『古今集』の前夜」(『北住敏夫教授退官記念日本文芸論叢』笠間書院、1976年11月、37頁)で、『新撰万葉集』における恋歌の大部分は男性が女性になりかわって詠んだものだと述べる。
 - 11 この歌は『続後撰集』にも収められ、「うらみてもしほのひるまはなぐさめつ袂に波のよるいかにせん」(巻十三・恋三・844・女につかはしける・清原深養父)とある。詞書から当歌が男の歌として理解されることがわかる。これは撰者の主観的な判断によるものだと思われる。
 - 12 小島憲之『古今集以前—詩と歌との交流—』「第三章 白詩圏の文学」塙選書81、1976年、223頁。
 - 13 渡辺秀夫「『新撰万葉集』論—上巻の和歌と漢詩をめぐる—」京都大学文学部国語国文学研究室 国語国文67(9)、1998年10月、8頁。
 - 14 西村亨『新考 王朝恋詞の研究』桜楓社、430頁。
 - 15 諸橋轍次『大漢和辞典』(巻四)大修館書店、昭和五十九年十月、4414頁。
 - 16 山崎健司は「新撰万葉集と菅原道真—上巻における和歌と漢詩の或る場

合」(日本語と日本文学 4 号、筑波大学、1984 年 12 月、6 頁)で「情田・莠」「心田・枯槁」が「縁語的な関係」を持つことと、上恋 101 と道真詩との関係を指摘した。本論に示唆を与えたところが大きい。

- 17 「露墜萎花槿、風吹敗葉荷」(『全唐詩』、白居易・晩笙歌)はその例である。
- 18 「草木庫小不滋」(『呂氏春秋』・明理)とある。
- 19 『日本紀略』(寛平五年九月二十五日条)に「菅原朝臣撰進新撰万葉集二卷」とあるように、『新撰万葉集』は菅原道真が編纂して宇多天皇に奉進されたものとされた。

引用資料一覧

『玉台新詠』『白氏文集』の本文と訓読は『新訳漢文大系』(明治書院)に、『古列女伝』は『古列女伝・女四書』(有朋堂書店、1920 年 6 月)に、『芸文類聚』は汪紹楹校『芸文類聚』(中華書局、1965 年 11 月)に、『游仙窟』は『遊仙窟全講』(八木沢元、明治書院、1967 年)、『文華秀麗集』は小島憲之校注『懷風藻;文華秀麗集;本朝文粹』(岩波書店、1964 年 6 月)に、『菅家文草』は川口久雄校注『日本古典文学大系 72』に、『大宝積経』は『大宝積経:外 33 部』(東国大学校)に、『万葉集』『古今和歌集』は『新日本古典文学大系』(岩波書店)によるものである。ほかの引用和歌は『新編国歌大観』(角川書店、1996 年)に従った。なお、表記については一部私意に改めた。